

一被爆者の意見

元広島平和記念資料館館長

高橋 昭博

私は高橋昭博と申します。よろしくお願いいたします。

中学2年生、14歳の時、爆心地から1.4キロメートルの市立中学校校庭で被爆しました。後頭部、背中、両手、両足に大火傷を負いながら、友人と一緒に逃げていきました。1年半の闘病生活ののち、文字どおり九死に一生を得ました。現在、被爆の後障害と思われる慢性肝炎をはじめ幾多の病気と闘いながら、被爆体験を語り続けております。

1954年5月、ビキニ被災を受けて開かれた「原水爆禁止広島市民大会」で、被爆者代表として初めて被爆体験を語りました。そして、翌年の1955年8月、広島で開かれた「第1回原水爆禁止世界大会」でも被爆体験を語りました。

それ以来、私は20年近く沈黙を続けてきました。「所詮あの生き地獄を体験していない者には分かる筈がない」という思いがありました。1970年のある時、親しい若い俳優の、静かな口調ながらも怒りにも似た言葉で、私は目が覚める思いでした。その俳優との語りの中で、「被爆体験のないものに何がわかるか」と、私はずっと抱いてきた言葉を言い放ちました。「高橋さん、あなたからそんな言葉を聞こうとは思わなかった。そういう言われ方をすると、私たち若者はどうしたらいいんですか。懸命にヒロシマを知り、学ぼうと努めても、体験のない者には『わかりっこない』とはねつけられたのでは、どうしようもないじゃありませんか」——私はハッとする思いでした。その俳優と会うまでもに沢山の人の人びとに、私は同じ言葉を繰り返してきましたが、その俳優のように、私をたしなめる人はおりませんでした。私は「たとえ1人でも、私の被爆体験を聞こうとする人があれば、これからは一生懸命に語り続けていこう」と思い直しました。

そして、1971年から本格的に被爆体験を語り始めて33年、ざっと3,000回以上、30万人を超える人びとが耳を傾けてくださいました。今年、被爆60周年を迎えました。時としてやさしく、時として激しく、舞台は回わり、あの人、この人と、多くの出会いがありました。

昨年8月2日、被爆時に一緒に逃げた山本達也君の衣服と、59年ぶりに対面しました。熱線でえぐられた腕の部分や表地が完全に焼かれ、裏地が出ているズボンなどを目にした時、とめどなく涙が流れるのをどうすることもできませんでした。彼の母親が「かたみ」として保存されていたのを、一昨年、彼の兄妹が原爆資料館に寄贈されたのでした。熱線でボロボロに焼けちぎられた山本君の衣服を見て、私は改めて「アメリカが憎い！」と思いました。アメリカはなぜ罪のない多くの中学生や女学生を無残に殺さなければならなかったのでしょうか。

原爆投下は、明らかに実験であったと思います。3つの理由があります。第1、アメリカは破壊力を比較するために、2つの違った原爆をつくりました。広島はリトルボーイ、ウラン型。長崎はファットマン、プルトニウム型。型も核物質も違います。第2、工業地域と市内中心部、つまり、密集する市民の家屋が攻撃目標でした。軍国主義を打倒するため

には、ぼう大な日本国民を殺す必要がありました。第3、焼夷弾による空襲を殆ど受けていない都市が選ばれたのでした。そして、それ以後、その都市への空爆は禁止されました。以上3点、原爆の威力や破壊力を実験によって試すために使用されたのでした。

「アメリカの将兵の命、日本国民の命、100万人も救ったのだから、原爆投下は正当であった」というのがアメリカの論理です。私は「アメリカよ、待ってくれ！」と言いたいです。100万人は仮説です。広島・長崎への原爆投下によって30数万人が亡くなっています。これらの命をアメリカはどう思っているのでしょうか。1人の命ですら地球より重いというではありませんか。

憎しみで憎しみを消すことはできません。憎しみのあるところに決して平和はあり得ません。たとえ苦しくても、憎しみは乗り越えていかなければなりません。自らが厳しい環境に置かれても、他者に心を開くことを忘れてはならないと思います。私はそのことを自らに言い聞かせ、心に刻んで生きてきました。

級友およそ60名のうち、山本君をはじめ50名近くが原爆によって無残に殺されました。現在14名が生き残っています。私はわずかな生き残りの1人です。無残に殺された級友たちの死を決して無駄にしてはならない。級友たちをはじめとする、死んでいった沢山の人の声なき声を、後世に、とくに若い世代に伝えていくのは、私たち生き残った者の務めであり、責任であると、自らに言い聞かせて生きてきました。

ところで、アメリカはアフガニスタンやイラクにおいてテロと戦ってきました。しかし、戦争はテロリストだけでなく、普通の住民を含む多くの人びとの命を奪います。混乱と無秩序をもたらす危険と隣り合わせです。イラクの現実まさにその証明ではありませんか。「テロとの戦争」は決して後世に誇れるものではなく、憎しみを広めてしまいました。世界がより安全になったとはとても思えません。テロの首謀者は厳然と生き続けているではありませんか。

アメリカの一国主義は不信と憎悪を生み、国際秩序を互いに重んじる心は決して生まれません。力が力を制する闘争に勝利はなく、真の平和は生まれません。世界各国が営々と築いてきた枠組みを重んじ、世界の人びとと共に生きる心を持ち異なる宗教や文化との共存を進めてこそ、世界の安全と繁栄が成り立つものと信じて疑いません。包括的核実験禁止条約や地球温暖化防止京都議定書から離脱したアメリカの一国主義は、まさに得手勝手というほかはありません。すべての人びとが納得する論拠をもって説得するのではなく、強い力をちらつかせながら、半ば脅迫的に自らの一国主義を通そうとするアメリカは、まさに、理不尽そのものというほかはありません。最近、ブッシュ大統領は欧州各国を歴訪し、国際協調路線をとろうとしておりますが、私は「本気ですか」と問いたいと思います。「今さら……」という思いがしてなりません。

一国主義で力を信奉してきたアメリカは使える核兵器として「小型核兵器」の開発に手をつけました。これは「核兵器拡散防止条約」の完全なる崩壊をねらったものと言えます。そもそも「核兵器拡散防止条約」は、まさに、不平等条約にほかなりません。アメリカをはじめロシア、イギリス、フランス、中国の5カ国は核兵器を保有してもよいが、他の国の保有は「まかりならん」というものです。こんな不条理で、論理的必然性を欠き、道理に合わない条約があるのでしょうか。私は被爆者として絶対に認めることはできません。

私たちは「核兵器絶対悪」であり、すべての核兵器を直ちに廃絶すべきであると、長年訴えてきました。私たちは常に裏切られてきました。なぜ 5 カ国だけが核兵器を保有してもよいのでしょうか。明快に答えられる人があれば、その理由を教えてください。

今、北朝鮮の核兵器保有が大きな国際的問題となっています。北朝鮮に一番近い韓国や日本にとっては、最大の脅威と言わざるを得ません。北朝鮮の核兵器保有に対して、アメリカは敏感に反応しますが、私から言わせれば、イスラエルの核兵器保有には、全く沈黙し続けるアメリカです。長年、イスラエルの核兵器保有は公然の秘密のように扱われてきました。なぜでしょうか。アメリカは北朝鮮と同様にイスラエルに対しても圧力をかけ続けてほしいと思います。

核兵器廃絶への日本政府の態度は、私たち被爆者の期待を常に裏切ってきました。「唯一の被爆国」というのであれば、加盟国の先頭に立つべきであると思うのですが、アメリカに追随し、気がねをするばかりで、「唯一の被爆国」としての責任も役割も果たしておりません。

2000 年の再検討会議において全会一致で採択された最終文書に「核兵器廃絶への明確な約束」との文言が盛り込まれました。被爆地ヒロシマは一様に「高く評価」しました。私は共同通信のインタビューに答え、「廃絶への期限のない約束」は「明確な約束」とは言えない。「それはホゴ同然だ」と断じました。その記者は「えらく厳しいですね」と言いましたが、「当たり前でしょう。筋道をつけて、期限を区切った約束でないと、私は信用できません」と付け加えました。5 年後の今、そのとおりにならうとしていませんか。核兵器廃絶への努力は何一つなされていないではありませんか。

今年の再検討会議に向けて、過去 3 回開かれた準備委員会は、結局、会議の会期や議長が決められただけで、核軍縮の進展状況をめぐる合意は成立せず、会議の議題も決まらなかったというではありませんか。申し訳ありませんが、私は 5 月の再検討会議には期待を持っておりません。核兵器廃絶への道筋を明らかにし、期限を付けなければ、核兵器保有国はどのようにでも言い逃れはできます。

また、平和市長会議が提唱している「核兵器廃絶の 2020 年ビジョン」は、内容には賛成ですが、余りにも長い。私は目標は短ければ短い程よいと思いますが、いかがでしょうか。長ければ長い程、とかく人間は気のゆるみが出てくるものです。失礼ながら、「今日もあれば、明日もある」ということにはならないのでしょうか。私たち被爆者には被爆 60 周年はあっても 70 周年はない——と思っています。2020 年はさらに 5 年先ですから、被爆者は死に絶えているでしょう。私はせめて、核兵器廃絶への道筋が決められたことを見とどけて、この世を去りたいものだと思っています。

核兵器廃絶ができるかどうかは核兵器保有国の指導者次第だと思います。核兵器保有国の指導者に決断を迫るのは、加盟国約 190 カ国の殆どの非核兵器保有国です。とりわけ新アジェンダ連合の活動に期待したいと思います。それらの国々と世界の NGO 諸団体が、さらに連携を密にして核兵器保有国の指導者に厳しく迫って行く最善の方策を見出したいものです。

さて、このあたりで私の発言の締めくくりをさせていただきます。

ヒロシマ学習の原点と言われる、東京・葛飾区立上平井中学校 2 年生であった K 君は、

学校ではワルとかツッパリとか言われていましたが、私との交流の中では素直で論理的な子供でした。ワルというイメージは全くありませんでした。

彼とは1972年頃、上平井中学校での懇談会の席上初めて会いました。その中でこう話しました。「僕は最初広島へは行きたくない、なんで戦争の災害地へわざわざ行かなければならんのか——と思っていました。しかし、行ってよかったと思っています。広島で平和学習をして、被爆者の痛みをとおして人間の痛みがわかる心を学びました。僕には家がある、両親も姉もいる、3度のご飯を満腹に食べさせてもらっている。しかし、世界には飢えに苦しむ子供たち、差別されている人びとや難民たちが沢山いることが、被爆者に教えてもらってわかりました」。私は深い感動を覚えました。

彼はある時、こうも話しました。「僕は台風や地震の方が戦争や核兵器よりこわいんです。台風や地震は、人間の力でも、科学技術をもってしても、今のところは防ぎようがありません。しかし、人間が起こす戦争、人間がつくる核兵器は、人間の英知を結集し、人間の努力を積み重ねていけば、きっと戦争は防ぐことができます。核兵器だってなくせないわけがないじゃありませんか」と言いました。

また、「あの向こうに高い山があります。その頂上に・世界平和・が待っています。その頂上に到達できる確率は1%に満たないかもしれません。しかし、僕はその頂上に登ってみせるという意気込みでチャレンジをします。勇気を持って立ち向かっていきます」と言いました。

彼は今、41歳、もとより結婚して子供もいます。私との交流も30年近くになります。やさしい夫であり、すばらしい父親です。「ヒロシマ」に対する思いも人一倍深いものがあります。

自らが行動を起こすことによって何かが変わる——という気概を持ちたいものです。平和に対する想像力を大いに働かせることが大変重要です。

再検討会議が一定の成功を収めるにせよ、不成功に終わるにせよ、引続き世界の英知を結集した核兵器完全廃棄への限らない努力が払われることを、私たち被爆者は心から期待してやみません。もとより、私たち生き残った者は、与えられた使命、つまり、被爆体験を命の燃え尽きるまで語り続けてまいります。

今、この地球上には、戦争、核兵器、テロ、地球温暖化、飢餓、難民、暴力、人権抑圧などの、「20世紀の負の遺産」が存在しています。21世紀を生きる人びとが、この「負の遺産」の後始末を誤れば、地球最後の世紀になるかもしれません。私も「宇宙船地球号」の一員としての自覚を失うことなく、残された命を全うしたいと、改めて決意しております。どうか、こうした思いをご理解いただきたいと思います。

ご静聴を心から感謝いたします。ありがとうございました。